

○ 作品タイトル「Daybreak」

○ 著者名 古野沙織

○ あらすじ

不妊治療に励む夫婦、史（39）と陸（36）、交通事故で自身も重症を負いながら妻と娘を失った勇人（31）、無職で精神疾患を抱え、自ら命を絶とうとする清士（24）。四人が偶然居合わせた深夜の牛井屋で、中年男性が倒れる。共に一人の命を救ったことで、それぞれが希望を胸に歩き出す。

○ 概要

命を授かることを望んでいる一組の夫婦、愛する命を失った一人の男性、自らの手で自身の命を終わらせようとしている若者。それぞれ異なる絶望を抱えながら、誰とも知らない命を救うことで、明日を生きたい。こうと思える微かな希望を描きました。人は外からは見えなくても、誰しも多かれ少

なかれ苦しみを抱えています。それはほんの些細なきっかけや思いがけない出逢いによって少しだけ背中を押してもらえることがあります。そんな小さな希望が伝わればと思います。

○ 本編文字数 四八四七文字

本編

○車内・深夜

東京に戻る道中の史（39）と陸（36）、渋滞にはまっている。

重い空気の車内、陸、無言で運転している。

史、助手席で虚ろな目で窓の外を眺めている。

陸「来月の診察いって言ってたっけ？」

史「…二十七」

陸「…もしかしたら出張とかぶるかも」

史「…」

陸「もう何度も調整お願いしちゃってるからね…ちよっとまあ…」

史「…」

陸「…ま、いいんだけどね」

史「…」

陸「毎月車で片道二時間はなかなかよ」

史「うん」

陸「もう少し近い病院にするっていう手も

あるよ」

史「∴。この三年ずっと海原先生に診てもらって来たし、不妊治療の名医だし、こないだあさいチにも出てたし」

陸「うん」

史「私と同じ年の人で先月妊娠したいって、今日看護師の川添さんも言ってたし」

陸「うん、わかるよ」

史「だから今から変えるって何か∴」

陸「そうだね」

史、気持ちが込み上げ言葉に詰まる。

2

史「今回は上手くいったと思ったんだけどな」

陸「∴」

史「あんな期待させるような顔しないで欲しかった」

タイトル「Daybreak」

○消防署・深夜

勇人（31）、左足にギブス、手に松葉杖で真野と向き合っている。

勇人「すみません、こんな夜遅く」

真野「もういいのか」

勇人「とりあえず歩くのは問題ないんで」

真野「歩くのは？」

勇人、苦笑い。

勇人「辞表ってあれですか、封筒に入れるやつですか。あ、でもデジタル時代、やっぱオンラインですかね。書いたことなくて」

真野「いやいやちょっと待て。そんな急がんでも」

勇人「これじゃ使いもんにならないすから。まあ、あの時も、全然使いもんにならないかったですけど…」

真野「…これからどうするか決まってるの？」

勇人「いや…」

真野「スピード落とすと見たくないものが

見えて苦しいよな。でも俺はお前に急いで欲しくないんだよ。独りになろうとすんなよ」

勇人「…もう独りになったんです」

真野「…。早朝でも深夜でも、誰かと話したくなったら、そうじゃなくてもいつでも連絡しろ。あれこれ考える前に俺の連絡先押せばいいから」

○勇人の自宅マンション

勇人、帰宅後テレビをつけ、キッチンで湯呑に水を入れ飲み干す。

テレビの声「今年十一月、飲酒運転の車が歩道に乗り入れ家族三人を含む男女七名が死傷した事故で警視庁は…」

勇人、無気力な目で部屋にある優乃とすみれの物や飾られた写真をいつまでも眺めている。

ふいに涙が溢れそうになり我に返り、湯呑を洗い始める。

○清士の自宅アパート・深夜

古いオンボロアパートの外観。

ゴミに溢れた畳の部屋、テレビは付
けっぱなし、複数の督促状と精神科
で処方された薬が散らばっている。
部屋の隅には埃を被ったスーツと
ネクタイがハンガーにかけられて
いる。
痩せこけて顔色の悪い清士（24）、
布団を被り、起きているのか寝てい
るのかわからない。

○サービスエリア

陸と史の車が駐車場に入ってくる。
二人、車を降りてフードコートの中
に入り、店の前に並ぶ長蛇の列と満
席の座席を見て、疲れ切った表情。

陸「飲み物だけにするか」

史「ああ、あの豚骨スープ、バケツで飲み

たい」

陸「自販機にあるかな」

× × ×

陸、ノンカフェインのお茶を手に戻って来る。

史に手渡し、二人で車の前で飲み始める。

史「もうやめたいでしょ？」

陸「ん？」

史「プレミアビール飲みながらプレミアリーグの試合見るのが、生きる意味だと言っててもんね。今どうやって生きてんの？」

陸「自分もカフェインそのまま飲んでるみたいなのエスプレッソ、何年飲まずに我慢してんの」

史「運動嫌いの陰キャくんがダイエットまでさせられてね」

陸「そろそろターザンの表紙のオフアーが来るかも」

史「趣味にお金もかけられなくなっちゃって」

陸「二人で決めたことじゃん。最初に話したでしょ」

史「止めたいって顔しないで止めたいって言ってよ」

陸「言っていないでしょ。ルックス批判ですか？」

史、苛立ちながら黙る。

陸「止めてもいいんだよ。好きな仕事まで辞めて、史が一番大事なものを手放してきたでしょ」

史「UFOキャッチャーみたいになってくんの。あと一回あと一回って、向きになって課金して、そのうちあれ、私何であるのぬいぐるみ欲しかったんだっけってなって。どっかで分かってんだけど、ここまで来たなら取るまで止めらんないんだよ」

陸「それがUFOキャッチャーの醍醐味で

もあるけどね」

史「それだけじゃないけど：陸から父親になるチャンス、奪ってるのも：」

陸「そういうのはナシって言ってるじゃん。フェアじゃないって俺何度も言ってる」

史、口つぐむ

史「（呟くように）もう可能性はゼロって誰か言ってくんないかな」

○ 勇人の自宅

勇人、冷蔵庫を開けるが、何も入っておらず小さく溜息。

○ 清士の自宅

清士、布団に入ったまま目を開け、スマホで日雇い求人広告を見るがすぐに気が滅入り閉じる。メッセ―ジアプリを開くと、数カ月前の母からのメッセ―ジ。

「もう帰ってこんで」

○（回想）区役所・昼

清士、職員とカウンター越しに向き合って座っている。

職員「家族いるでしょ？まずご家族にサポート依頼してくださいね。あと仕事選んでちゃダメだよ。若いんだから選ばなきゃあるから。今ね、生活保護申請する人本当に多いんですよ。もっと大変な人たち沢山いるの」

清士、憔悴しきった表情。

（回想終わり）

清士、カーテンレールにネクタイを引っ掛け、首を吊る準備をしている。テレビではバラエティ番組が流れている。

タレントA「じゃあじゃあ最後の晚餐で何食べたいですか？」

タレントB「え——最後に食べるもの？う——迷うけど俺はやっぱ寿司かな！」

タレントC「私は、カスタードクリームがめっちゃ好きなんでー死ぬほど食べたんです！」

出演者たち、騒いでいる。

タレントD「俺はやっぱり結局牛井ですね。

牛井に何度も救われたんで」

清士、手を止め、テレビの方を振り返る。

○牛井屋

勇人、牛井屋の前で足を止めた後、入店する。

カウンターには中年男性が一人で食事をしている。

店員「いらっしゃいませー。好きなお席にどうぞ」

勇人、カウンターに着きメニューを見始める。

○陸と史のマンション駐車場

陸「やばい、一瞬あの車にあるクッションが肉まんに見えた……」

史「（お腹抑えながら）限界……」

陸「たまには行こっか？」

○牛井屋

陸と史、入店し牛井の匂いに思わず顔が綻ぶ。

カウンターに着き、メニューを見始める。

カウンターには中年男性と勇人が座っている。

X X X

清士、牛井屋の前で立ち止まり、メニュー看板の「牛井 小盛 四二三円（税込四六五円）」を見て、ポケットに手を入れる。

手には小銭で四二三円。

消費税分だけ足りず一瞬落胆するが、振り切ったように入店する。

カウンターには、史、陸、勇人、中年男性が食事をしている。

× × ×

店員「お待ちせしました！」

店員、清士の前に牛丼の小盛を置く。

清士、久しぶりのまともな食事に、鼻から湯気を吸い込み、噛み締めた後牛丼をかき込む。

× × ×

四人、静かに黙々と食事が続けている。

突然、中年男性が椅子から転げ落ちるように倒れ、微動だにしない。

史「え」

陸「どうした？」

勇人、男性に駆け寄る。

勇人「（冷静に肩を叩きながら）大丈夫ですか、聞こえますか？」

陸と史、動揺しながら駆け寄る。

清士、席に着いたまま、ただなら

ぬ空気に三人の方を見る。

史「何？どうしたの？」

陸「わかんない」

緊迫する雰囲気の中、勇人、手際よく男性のシャツのボタンを外し、呼吸を確認する。

陸「意識ないんですか」

勇人「呼吸してません」

陸と史、動揺しながら勇人の手際の良さに圧倒されている

勇人「私、消防隊員です」

陸と史、安堵の表情。

史「そうなんですネ…！」

勇人「（陸に向かって）AED探してください」

陸「わかりました！」

勇人「（史の方を向いて）あと救急車をお願いします」

史「はい！」

史、スマホを取り出し、一一九番に

かける。

勇人、心肺蘇生を始める。

陸「A E D、どこだ！」

陸、厨房の奥に向かって叫ぶ。

陸「すみません！すみません！男性が倒れてます！」

奥から店員が出てくる。

店員「はい、お待ちせしました」

陸「男性が倒れて意識ないんです！A E D

どこにありますか？」

店員「えっ、えっ。うそ。あ、お客さん！

大丈夫ですか。どうしたんですか」

陸「A E D」

店員「はっ、えっと、A E Dは、A E Dは

たしかこの先のショッピングモールにあつたと思います。自転車置き場の近く」

陸、店を飛び出す。

勇人、心肺蘇生を始めている。

勇人「君、二分経ったら代わって」

清士、放心状態で見ている。

勇人、清士の方を振り返る。

勇人「君だよ、君。あと一分で変わって！」

びくりとした清士、慌てて駆け寄り、

勇人と代わる。

清士、おそるおそる蘇生を始める。

勇人「もっと強く体重かけて」

清士、言われるがまま一心不乱にマッサージをする。

史「着くまで七分くらいだそうです」

勇人「スピーカーにしてもらえますか」

史、スマホをスピーカーにして床に置く。

清士、勇人と交代しながら、汗だくで蘇生を続ける。

瀕死状態の男性の顔を見つめ、自分を重ねる。

徐々に救いたい気持ちが溢れ手に力がこもってくる。

史「救急車が来る前にここ片付けましょ

う！通りやすいように」

店員「そうですね！」

X X X

陸、息を切らしながらAEDを抱えて戻って来る。

陸「ありました！」

勇人、パットを中年男性に貼り付け、手順通りに処置していく。

勇人「離れて」

勇人、電気ショックを与えた後、マッサージを続ける。

勇人「（呟くように）あの時、何も出来なかった」

（フラッシュバック）

勇人、買い物袋片手に優乃とすみれと歩いている。

勇人と優乃、曇った表情で口喧嘩をしている。

突然車が歩道に突っ込んでくる。三人を含む、歩行者が四方八方に飛ばされ、静まり返る。

倒れて微動だにしない優乃とすみれ。

勇人、左足に重症を負いながら、微かに目を開けると視線の先に優乃とすみれ。

動こうとするが、身動きがとれず絶望する。

（フラッシュバック終わり）

陸「私、代わります」

勇人、陸と心肺蘇生を変わる。中年男性、意識レベルが僅かに上がって来る。

勇人「僕の手、握れますか？」

中年男性、微かに握り返す。

清士「生き返った：？」

陸「ちょっと反応しましたよね？」

遠くから救急車の音がしてくる。

史「外見てきます！」

史、店員と一緒に外に出て、救急車を誘導する。

X X X

救急隊員によって担架で運ばれていく中年男性。

隊員たち、四人に頭を下げて救急車に乗り込み去っていく。

しばし放心状態の五人、はたと我に返り、お礼を言い合い席に戻る。

陸「お会計お願いします」

店員「今日は大丈夫です」

陸「いやいや」

店員「私一人じゃ何も出来なかったですから。皆さんいてくださって本当に良かったです。ありがとうございました！」

四人、見えない絆を感じる。

勇人「（清士に向かって）ありがとう」

清士「いえ：」

勇人「（にやりとしながら）でももうちょっと鍛えた方がいいよ」

牛井店から三組がそれぞれ出てき

て、散り散りになっていく。

X X X

勇人、歩きながら涙が溢れてくる。
スマホを開いて、真野の連絡先を押
し、繋がる。

勇人、言葉にならずしやがみ込み、
泣きじゃくる。

X X X

陸と史、無言で並んで歩いている。

何か吹っ切れたような晴れ晴れと

した顔をしている。

史「もうぬいぐるみいいかも」

陸、史の顔を見る。

史「ぬいぐるみの代わりにやりたいことが

出来た」

陸「何？」

史「とりあえずプレミアリーグ生で行
こうよ」

陸「まず、オフサイド勉強してくれる？」

史と陸、笑い合う。

史「来月で最後にする」

陸、史の手を取り、しっかりと手を繋ぎ歩いて行く。

X X X

清士、放心状態ながらも微かに晴れやかな表情。

ポケットに手を入れ、小さな紙切れを取り出す。

（フラッシュバック）

史、陸、清士、勇人、店を出ようとすると店員が追いかけて来る。

店員「あとこれもどうぞ！またお待ちして

おります！」

（フラッシュバック終わり）

清士の手の中には「お好きなトッピングが無料！」と書かれたクーポン。

大切にポケットに仕舞い直し、右腕で力こぶを作ってみる。

真っ暗闇の中、遠い空の向こうが僅かに白み始めている。

（終）